

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：土原一二 幹事：山上啓介

情報委員長：米沢修一

1980・7月10日 第169号

ご挨拶

1980～1981年会長 土原 一二



今度皆様の御推薦により会長の重責を担いました以上、この一年間は、健康に注意して、何とか責任を果したいと思っておりますから、何卒よろしく願います。

「ロータリーとは他人に対する思いやりと、他人のために、つくすことである。」と機関誌ロータリーの友に出ています。我々ロータリアンは、常にこのことを念頭に置いて、いなければなりません。国際ロータリーは75周年も過ぎ、加盟 153ヶ国、会員86万人と、日々拡大増強に向かっていますし、我が金沢北RCも創立以来7年目、益々充実して、奉仕の理想実現のために、着実に前進していること

は誠に御同慶の至りです。今のところ本年はホストとなる様な会合は何もありませんが、気を抜くことなく、会員一同、心をひきしめて、マンネリ化に陥らぬ様に頑張っておくるべき十周年に備えての「充実」の年と致したいと思います。

本年のRI会長、ロルフ・J.クラーク氏は次の如きターゲット“TAKE TIME TO SERVE.”(時間を捧げよう 奉仕のために)を示して、ロータリアンの向ふ道を教示しています。

物さえ出せば、金さえ出せば、奉仕終りという考えでなく、勿論、物も金も必要ですが、此等のほかに、心のこもった奉仕、しかも自ら時間をかけて、汗を流した奉仕の方が、はるかに有意義ではなかろうか、正に1980年代は、心を必要としています。之はたゞにロータリーの世界ばかりでなく、政界も、経済界も、教育界も同じです。

私はこの一年間の活動方針として、簡素にして、心のこもった行事を展開したいと思います。たくさんある行事の中で、特に次の三項に、重点を置きたいと思っております。即ち

1. 例会を楽しめるものとする。

毎週の例会は修練の場であるから、厳粛なことは勿論であるが、その中でも寛いだ気持ちで、楽しく語り合う場を求めて、恰も一週間の苦勞を洗い流す、大衆浴場の様にしたいものです。

2. 「ロータリーの友」を活用すること。

クラーク氏RI会長が1日2時間は「ロータリー」のことを考えてほしい、と提唱しているように、機関誌「ロータリーの友」を、もっともっと活用したい。

3. 例会出席率の向上

例会出席の意義を更に考え直して、塩村会員の云う「正確で堂々たる出席」が過去の100%の栄光に及ばなくとも、せめて99%位までは出来ないものか。

以上、いろいろ希望やら、お願いやら申し上げましたが、皆様の御協力によって、是非実行したいと思っておりますので、重ねてお願い致します。

“幹事を務めるに当って”

1980～1981年幹事 山上 啓介



副幹事の時は何時もメインテーブルに座って、塩村名幹事のウイットに富んだ進めぶりを、なにげなく眺め、聞き過して来た一年間でしたが、いざ最終例会で、バッヂの交換をし“よろしく”とお酒を注いで廻ったら、皆さんから励ましの言葉やら、なぐさめの言葉やらを色々云われ、これも順番かなあ、とあきらめている次第です。つけてもらったバッヂを、虫メガネで良く見た所“セクレタリー”と書いてあり、幹事の意味には間違いないが、秘書官でもあり、良く云えば、長官か大臣でもあります。先日我が北クラブのホストで皆様の手をわずらわせた、会長幹事研修会なるものがありました。その幹事分科会に出席した際、その講習資料の中で次の様な言葉が

出て来ます。緒言として“幹事殿、当選おめでとう御座います”と有り、次に名幹事となる10ヶ条と云うのが有ります。それを要約して書きますと次の通りです。

1. 幹事の資格・職責を自覚する。
2. 会員との融和を計る。
3. ロータリーの知識に精通する。
4. 詳細な年間プログラムを作る。
5. 各委員会と絶えず連絡する。
6. 提出諸報告送金等の期限を守る。
7. 他クラブ幹事と交流を深める。
8. 不明な点は先輩に尋ねる。
9. 副幹事があれば早く育てる。
10. 事務局ロータリーにならない事。

私は今迄安易に考えていた幹事職に大変複雑な気持と不安感をおぼえ、向う一年間やっていけるかなあと心配している次第です。

幹事は扇の要と云われますが一人相撲はやめて皆さんがプログラムに参加出来る様、努力したいと願うものです。幸いにして土原先生と云う、大変責任感の強い会長さんをキャツプに、各先輩理事諸氏の助けを借りて予定通り直っすぐに行きたいと思っていますので、何卒よろしく御指導、御協力をお願い致します。

歴代、国際ロータリー会長の指針

1961～62年度 ジョセフA.エービー(米国)

1. 行動に努めよ。
2. 理解に途を求めよ。
3. 指導力を高めよ。

私の留学生活(1)

交換学生 大村 一史

まず始めに、この一年間米国留学という貴重な体験を、この私に与えて頂きましたことと、無事元気に帰国できましたことを、金沢北RC会長様、幹事様、国際委員長様やその他の会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は、忘れもしない昨年4月7日、AM10:45成田発JA2006便で、1年間の留学へと出発しました。保護者の同伴なしの海外渡行は、今回が初めてだった私ですが、私の他に、他地区ではありますが同じ米国に留学する金沢の交換学生と、バッファロー大学に留学する学生の方とも同行させて頂きました。しかし、出発から引き受け家庭までの道程は、“これからうまく一年間過ごせるだろうか？ ホストファミリーはどんな人達なのか？ 友達はできるだろうか？ 途中病気になったらどうするのか？ 言葉が全く通じなかったらどうしようか？ (もっとも通じないのがあたりまえなのですが) などと考えて、心配のし通しでした。結局、14時間のロングフライトの末、ようやくニューヨーク州のロチェスター(Rochester)に到着しました。

私がそれから1年間住むことになる、カレドニア(Caledonia)という町は、米国五大湖の一つである、オンタリオ湖(Lake Ontario)の南岸にある工業都市ロチェスターから南へ車で約20分のところにある、人口4,000人の小さな村でした。その町のRCが、今回の私のホストクラブとなったのです。村のまわりは、一面とうもろこし畑と、牧草地で、一見、北海道の原野を思わせる雰囲気があります。ですから、町もこれといって産業もなく、ロチェスターにある、コダック社(Eastman Kodak co.) やゼロックス(Xerox co.) など働く人達のベッドタウンとなっているのです。又、RCも非常に小さく、会員は13名。例会には、なんと7、8人程度が来るのが常でした。

到着後、まず第一の壁は、言葉の問題でした。正直言って、中学と高校における4年間の英語の勉強で、いったい何を自分はしてきたのか疑うようでした。つまり日本での、大学受験用の英語は、8割方役に立たないということなのです。殊に、発言にかけては、全く駄目で、身振り手振りは勿論、揚句の果てには、辞書上の単語を指さして見せ、やっと理解してもらえるような、会話の極限を越えた、惨めなものでした。その後、約3ヶ月半余り、このように辞書を片時も手放さない生活が続きました。



